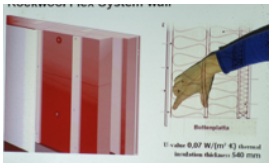


省エネ

カリン博士の自宅を訪ねて、プラスエネルギー住宅の実際を…

福祉

高福祉の実際を小谷部育子さん設計のコレクティブハウスで…

北欧デザイン

アスプルンド、ヤコブセン、ウエグナー、フィン・ユール…

現代建築・新都市開発

いま世界的に注目を集めるアマーエリア、ベストラハムネンで…

2014.10.13-19

南雄三と行く海外研修視察IN北欧

スウェーデン＆デンマーク

ヤーナ・シュタイナー学校

省エネ・福祉・北欧デザイン+α シュタイナー・エコ・現代建築

超大型の台風19号が速度を落としてくれたお陰で、わずかな時間差で成田を飛び立つことができました。窓には激しく水滴が・・。久しぶりの北欧でしたが、私と添乗員を含めて21名と盛況。さすがに北欧は見どころ豊富で、沢山の視察をこなしました。高断熱と福祉そして北欧デザインの強力な三本柱に加えて、南ツアーらしくシュタイナーとエコと現代建築を加えました。
高断熱では25年も前に何度か訪れたルンド大学のエルムロス教授に師事したカレンさんのプラスエネルギー住宅を、また、ソーラーウォーマーを開発したソーラーベント社を訪ねてデンマークのソーラー利用の一面をみました。**エコ**では古典的なTORUPのような小さな団地と、いま世界的に注目を集めるコペンハーゲンのアマーエリア、そしてマルメのベストラハムネンを視察。**福祉**では介護ホームのモデルハウスと日本にコレクティブハウスを導入した小谷部育子さんが設計したクナッペン・コレクティブハウスを訪問。北欧デザインでは、ヘルシンキでアスプルンドの森の火葬場と市立図書館を、コペンハーゲンではヤコブセンのSASホテルは当然として、ちょっと走ってベルビュービーチの白い建築群を見た他、デザインミュージアムでウエグナーらの椅子を飽きるほどみて、極めつけはバスを走らせてフィン・ユールの自邸まで観に行きました。

南ツアーらしく早朝のセミナーでツアーがはじまりました…

アスプルンドの森の火葬場はただ芝の斜面で、頂上に十字架がみえます。世界遺産になったこの作品をどうみればよいのか・・登り切ると森の影に礼拝堂があって、それはとても静かな建物でした。現世の威厳を敬う日本の葬儀と違って、ここでは人が尊厳をもって天に召されることがみえるようでした。次に市立図書館をみました。円形の壁全面に並ぶ本の群れに圧倒されながらも静か。まるで自分の書斎にいる楽しさと落ち着き。哲学もディテールも研ぎ澄まされているに違いないが…すべては空気の中に溶け込ませてしまう、これがアスプルンドの実力であり魅力。

ヤコブセン初期作品であるベルビュービーチの白い建築群、そしてSASホテルの色あせたカーテンウオールの高層建築をみていると、モダニズムの呪縛と戦っているように思えたが、そこにはエッグチェア、スワンチェアの可愛い椅子があって、ヤコブセン独自の近代が語られていました。そして国立銀行に行ってみると、そこにはあの「釣り階段」があり、ここでも２つの椅子がまるでヤコブセンの落款のように在りました。**フィン・ユール**も**ウエグナー**もモダニズムの白くて薄い壁の中で、強烈な存在感をもった名作の椅子をつくり続け、ヘニングセンは無味な空間に光の演出をしてみせました。北欧デザインは過去の否定ではなく、過去も認め、更に先に進む・・そんな心意気をみせていました。

久しぶりに訪れるヤーナの**シュタイナー学校**は、以前と違って教員を育成するものではなく、一般のシュタイナー学校に変わっており、少し荒れているようにみえました。心の内面は自分にしかみれない。だから自分にしか触れない。その内面を鍛えることで自分が豊かになる。そして内から外につなげていく。外から自分をつくるのではなく内面から外に広がっていく。そんなレクチャーを受けた後では空の青さまでが違ってみえた

Torupも２度目ですが、樹木が生長してまるで違っていました。覆面のようなドームハウスや封土住宅が木々に隠れていました。ジャガイモ畑の半分を宅地に半分を畑に残して開発されてから27年。「循環するエコ」の試みは、今の「省エネのエコ」の一面的なものに比べると、ちょっと重くて、面倒で、雑なものにみえてしまう。私がこうしたエコを視察して、日本で挑戦したわが家は日本らしい爽やかなものを目指したつもりだが、そんな意欲も今の省エネ世界では古いものにみえてしまうのでしょう。

Torupが旧なら、今話題の新エコがコペンハーゲンに隣接した**アマーエリア**とスウェーデン・マルムの**ベストラハムネン**の開発。落ち込んだ90年代に国の再建を構想する中でアマーエリアは開発されました。地下鉄を延ばして6つの駅が街を貫き、周辺を国定公園に指定して緑と水を永久に残します。そんな自然に囲まれながら、現代建築がノビノビと自分勝手なデザインをみせて、楽しませてくれました。ベストラハムネンでは世界的な未来の住宅展が一画を占め、そこには様々な新エコ住宅が立ち並び、バラバラながら、それで1つの統一感をみせていました。そしてあのカラトラバが高層アパートをネジってみせて、すべてを飲み込みます…

高福祉・高負担は小国が経済力をもつために女性を職場に送り込むことからはじまりました。それまでは日本と同じに妻が親と子の面倒をみていました。女性が男性と対等な働き手になれば、所得税と夫の扶養から外れてダブルで税が増えます。この税収増で国は親の介護と子どもの教育を負い、女性が出産しやすい環境を整えました。子は18歳で独立し、親も24時間態勢の介護サービスを受けて在宅介護。自立心があることで成立する構造ですが、それは家族の在り方を変える大変革でした。自殺、離婚、犯罪が増えましたが、今では逆転し、世界一幸せな国になりました。

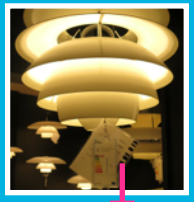
アスプルンドの森の火葬場（左）と市立図書館

ヤコブセンのSASホテル（左）とベルビュービーチ集合住宅（右）

ウエグナーの椅子と自宅写真

ヤコブセンのスワンチェア

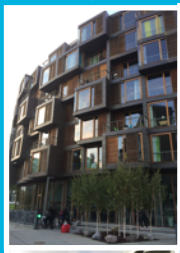
フィン・ユール自邸



エネパス表示

ヤーナ・シュタイナー学校

Torupエコ団地の封土住宅



アマーエリアの現代建築

カラトラバ設計のアパート

ガラスがグニャグニャEmporia複合施設

デンマーク・アマーエリア

90年代のデンマークは悪いものづくしだった。コペンハーゲンの発展を考える委員会が開かれ、それはデンマーク全体を考えるものに発展した。①スエーデンとデンマークを橋でつなぐ、②空港を2,3倍に拡大して北欧のハブにする。③国際的な企業を誘致するエリアの開発…これら3つの構想がつくられた。
ここは元々軍隊の土地だった。コペンハーゲンと空港の間という好立地で、ここに地下鉄を延長して新都市をつくることになった。国際的なコンペでフィンランド人の建築家が一等をとり、国との合弁会社がつくられて開発がスタートした。マスタープランは４つの地域に分けられた。①学園地域、②もと万博会場+ショッピングモール、③オフィスと住居、④アリーナ。長さ5㎞、幅600m、総面積300万㎡。６つの地下鉄駅があり、集中暖房、駐車場はあまりつくらない想定で、昼は企業が、夜は個人が利用する。周辺は国定公園にして永久に自然を残す。

Torup　アンナさんの解説

1987年にはじまった。14ヘクタールの規模で、もとはジャガイモ畑だった。半分を宅地にし、半分を畑のまま残した。現在72軒あって、住人は180人。赤ちゃんから97歳にお年寄りまでおり、子供だけでも60人もいる。
村の規則（存在意義）は「再利用できる」こと。各戸は建築家が設計するが、個人の権利を尊重しながらも、共同生活を可能にするデザインが求められる。近隣の人たちとのお付き合いも重要で、村に招待することもある。農地は全員の所有物で、利用する人は利用料を払う。共済費は年間3000クローネ（約6万円）。地域暖房、太陽熱利用、太陽光発電、パッシブなどを実践している。家のエネルギーは自分で選べる。集会場や共同洗濯室があり、洗濯は雨水利用。
夏は村以外の人に貸し出すこともある。ヨガ教室を開いたり、夏はコンサートが開かれる。
自給自足の生活を目指したが、外で働く方が楽だと考えた。直接民主主義で、年に4回会議が開かれ、一人一票で決められる。なので村長のような人はいない。

クナッペン・コレクティブ・ホーム　モニカさんの解説

子育てが終わって50歳になると、一人で孤立したくなかった。コレクティブハウスをつくろうと親族に声を掛けたが実現せず、外に声をかけると多くの人に賛同された。当初は7名で始まったが、20名になった。自治体経営の管理会社に掛け合ってアパート形式が可能になり、お金のない人でも参加できることになった。
設計は日本人の建築家・小谷部育子さんで、熱心に相談にのってくれ、長時間掛けてガイドラインがつくられた。　93年の第1期の入居者は21年が経過した今でも半数が居住し、半分が亡くなったり引っ越し、5名が介護施設に入った。　コレクティブハウスは介護態勢はないが、介護を呼ぶこことはでき、3名が昼も夜も介護を必要としている。現在、43世帯、53名が暮らしている。ほとんどが単身で、平均年齢は67歳。最も若い人が55歳、最長老は95歳、12名が80歳以上だ。
義務は食事をつくること、掃除をすることと庭の手入れをすることで、キャパシティに応じて参加する。作業しながら交流が図れるように、作業室は1階にまとめられており、廊下の間仕切りをガラスにして、作業している様子がみえるようにした。作業はチームをつくって行い、チームは1年間続ける。
家賃は管理会社に直接支払う。一般のアパートより安く住めると思うし、チームで作業するので時間も稼げる。食事はクーポンを買う。食べたくない人はクーポンを買わない。義務感をなくす。庭の手入れをして、管理会社からお金をもらい、その収入で家具を買ったりする。部屋は37㎡～44㎡で小さいが、共有部分があるので広く使える。ハウスに居ながら交流もできるし、部屋では自分の好きな絵や写真を飾ることができる。

ヤーナ・シュタイナー学校

デザインの基本はフォルムを統合して全体的なものにすること。全体がつながることで生きている感じになる。直線を嫌い、単一を避け、多様性を描いてみせる。
窓から差す光は変化する。自然は最大の創造者だ。目を瞑って内面をみる。内面をみるのは時間が掛かる。内面は外の人からはみえないから、自分でみる必要がある。
アントロポゾフィー（人智学）は、内面を探求し、探ることを助けるもの。内と外はつながっていて、外から学ぶのではなく、内側のものを出していくことで発展する。